

---

# 悪ふざけ

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

悪ふざけ

### 【Nコード】

N1046B

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

おばさんの罫にあえて乗りお見合いへと挑む蒔絵。彼女はそのお見合いをぶち壊す為にあの手この手を使うがさてさてその結果は。女性にとっての運命の一戦をコメディィーにしてみました。

## 第一章

悪ふざけ

この時高橋蒔絵は悩んでいた。どうするべきかと。  
「困ったわね」

深刻な問題だった。彼女にとっては。これは適齢期の女性にとっては誰にもある問題でありこれをどうするかで人生が大きく変わるのである。

それは何か、お見合いである。これで結婚するかどうか、そして相手によって大きく変わる。一か八か、鬼が出るか蛇が出るか、それによって人生が決まる。だからこそ深刻に悩んでいた。

これで乗り気ならまた違う。だが彼女は乗り気ではない。嫌で嫌で仕方がなかったのだ。

断りたかった。結婚なぞしたくはなかった。別に彼氏がいるわけでもない。一年前に喧嘩して別れたきりだ。それから男と付き合ったことはない。これで酔っ払って朝起きたらベッドの隣に見知らぬ男がいれば面白いのであるうが生憎そうしたことなかった。彼女はこの一年ずっと一人であり相手も見つからなかった。すると親戚のやたらと耳の早いおばさんが彼女に声をかけてきたのだ。

「あんた、最近彼氏もいないんだってね？」

「まあそうだけど」

休日急に家にやって来てケーキを食べながら話が始まった。ここで出されたケーキが蒔絵の好きなモンブランであったというのはそもそもここに含むものがあつたのだろう。

「でさあ」

「うん」

悪ふざけ  
蒔絵はその日本人離れた二重の目をパチクリとさせた。実は彼女は美人である。背は普通位で色は白く、白人と言われても通用する。髪は黒く肩で揃えている。スタイルはさして目立つ程いいとい

うわけではないが悪くはない。特徴的なのはその目であり、黒く大きい。ぱっちりとした目なのである。彼女と付き合う男は皆最初にその目が好きになったと言う程である。

「あんたもそろそろね」

その言葉を聞いた時絵は心の中でまさか、と呟いた。この言葉を聞いて嫌な予感がしたのだ。

「相手がいたらどうかしら」

(やっぱり)

それを聞いて内心舌打ちした。予想通りであった。

「と思ってるんだけど」

おばさんは更に言葉を続けた。

「どうかしら」

「はあ」

「嫌なの？」

時絵が乗り気でないのを見抜いて責めてきた。

「おばさん言っとくけどね」

「うん」

こうなつては向こうのペースだ。相手は見合い相手を見つけてきて結婚させるのが生きがいなのだ。時絵の相手になるような人ではなかった。彼女はあれよこれよという間にそのペースに巻き込まれていた。

「あんたの歳にはもう子供がいたのよ」

これは決まり文句であった。二年前にも言われた。また実際に子供がいたのだからさらに始末が悪い。事實は嘘よりも説得力がある。この場合は特に。

「だから言っけどね」

「ええ」

完全に向こうのペースだ。言葉に頷くだけである。

「結婚は早い方がいいの」

「そうなの」

とりあえずケーキを口に入れる。

「だってねえ、これからすぐ歳とっちゃうのよ」

「うん」

モンブランの甘みも何処へやら。味気ないものとなっていた。

「それ考えるともう身を固めておいた方がいいわよ」

「けれど今は」

話の勢いが止まったところでとりあえず反撃を言ってみた。

「あまり」

「もう一年も彼氏いないんでしょ？」

「まあそうだけど」

流石に耳が早い。それを知っているから見合いの話を持って来たのだからが見事な早さだった。

「まあ一度会ってみなさいって。悪い人じゃないし」

「悪い人じゃないの？」

ここで蒔絵は迂闊な一言を言ってしまった。これを言ったらもう相手のペースにはまっついていくばかりだというのに。迂闊な一言であった。

「だって私が見たんだもの」

おばさんはその巨乳というよりは単に太っているだけの胸を大きく前に突き出して答えた。蒔絵はその胸を見て自分もそのうちこっぴどくなってしまうのだろうかと心配になった。

「間違いないわよ」

「そうなの」

「そうよ。まあ大学はそこそこだけどね」

「ええ」

今度は身を乗り出してきた。蒔絵も知らず知らずのうちに身を乗り出してしまっていた。

「背も高くてね」

「ふんふん」

実は彼女は背の高いのがタイプなのだ。自分の背は大人の女とし

ては普通だが付き合う相手には背を求めてしまうのだ。といっても自分より高ければそれでいいという感じなのだ。

「男前なのよ。写真見る？」

「まあ見るだけなら」

「乗り気なのを隠して言う。」

「見てみようかな」

「わかったわ、それじゃ」

「おばさんはそれを受けて写真を出してきた。」

「この人なんだけど」

「この人？」

「そうよ。学生時代はサッカーをやっていたらしくて」

「サッカー」

彼女は野球とサッカー両方好きである。野球はロツテ、サッカーは柏だ。特に千葉に思い入れがあるというわけではないがこの二つのチームが好きなのだ。

「今でもスポーツが好きでスラッとしててね」

「それでどんな人なの？」

「またむざむざとおばさんの術中に入ってしまった。」

「見たい？」

「ええ」

「おばさんはその言葉を聞いて心の中で会心の笑みを浮かべた。」

「じゃあお見合いですか？」

「その前に写真見せてよ」

「駄目よ、お見合いないのなら見る必要ないでしょ」

「ここまで話引張ってそれはないじゃない」

「口を尖らせて不平を述べる。」

「意地悪」

「知らなかったの？私は意地悪なのよ」

「居直ってきた。」

「見たければお見合いです。どう？」

「つまり結婚しろってことなの？」

「そんなことまで言っていないでしょ。とにかくどうするの？」

言っているが何時の間にかはぐらかしていた。そのうえでまた問う。

「お見合いするの？しないの？」

それからまた言う。

「写真見るの？見ないの？」

「うう……」

辛い二択だった。だが彼女はここで思いなおした。

(待てよ)

と。心の中で呟いた。

受けると言っても正式に結婚まで話を持って行かなければいいのだ。断られればそれでいいのだ。話はそれで済む。彼女はそうすることにした。

「見るわ」

意を決してこう答えた。当然そこにはもう一つの意味も含まれていた。

「見るのね」

「ええ」

おばさんはそれを聞いてあえて尋ねてきた。蒔絵はそれに頷いた。

「だから。写真見せて」

「わかったわ。これよ」

お見合い写真を取り出してそれを見せる。こうして彼女はあえておばさんの狡猾な罠にはまったのであった。

## 第二章

彼女は今それを非常に後悔していた。そのお見合いは明日に迫っている。泣いても笑っても、逃げても喚いても明日はやって来る。これはどうしようもないのだ。

「さて」

今更になって後悔しているうえにどうしようかと悩んでいた。

「何かいい方法はあるかしら」

まずは見合い相手の顔を思い出す。男前と言えば確かに男前で真面目そうな顔をしている。

「ほら、真面目そうでしょ」

おばさんも写真を見せながらそこをアピールしてきた程だ。お見合い写真らしくスーツを着て直立しているその写真からは確かに誠実で真面目そうな雰囲気か漂っていた。おそらくおばさんの言葉は嘘ではない。

「銀行員でね」

「ええ」

職業もお堅い。これはもう完璧であった。

「間違いないと思うわよ」

そのおばさんの言葉を思い出していた。確かに間違いはないだろう。だがそれでも時絵は今結婚したくはなかった。そもそも男と付き合うのも遠慮したかったのだ。

「けれどどうすれば」

見合いを壊せるのか。それが問題であった。

ここは完璧に壊れる方法を取らなければならない。それにはどうするか。考えた結果ここは徹底的に見合いにそぐわないことをしてやろうと思った。

「よし」

彼女は顔を上げた。そしてクローゼットを開け、次に化粧台に目

をやった。

「これで。絶対に断らせてやるわ」

意を決した女の顔になっていた。彼女は見つけ、そして決めたのだ。これでお見合いを破談にしてやると。これなら確実だと自分の部屋で会心の笑みを浮かべていた。

そして次の日。絶対に来て欲しくなかったお見合いの日だ。朝早くからいきなり携帯に電話がかかって来た。

「はい」

寝惚けた顔と声でそれに応える。電話の主はおおよそわかっていった。

「今日だけれどいい？」

お婆さんの声がした。予想通りで頭にきた。

いいと言わないといけない場面だ。断ることは今更許されない。

蒔絵もそれはわかつている。だから彼女が答えることが許されている返事はこれしかなかった。

「ええ」

了承した。他にはなかった。

「十時にね。わかった？」

「うん」

電話で頷く。

「それじゃあね。駅で待ち合わせるわよ」

「何時に？」

「九時よ。それでいいわよね」

「ええ」

とにかく断るという選択肢は彼女に許されてはいないのだ。言われるがまま頷くしかない。そして彼女は頷いた。これでやることは決められた。

電話を切った。蒔絵はそれから行動に移った。

「さて、と」

服を選んで化粧をする。戦闘準備だ。いや、既に戦いははじまっ

ていた。断られる為の、破談にする為の。今彼女はその為だけに大きく動いていた。

戦闘準備を済ませて駅に向かう。この時彼女は肩で風を切っていた。

「見ていらつしゃい」

道を歩きながら言う。我ながら芝居がかっていると思った。

「絶対に潰してやるんだから」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。それは確かにお見合いに向かう顔ではなかった。言うならばリングに入ろうとする女子プロレスラーの顔であった。

駅に着く。おばさんはもう着飾って待っていた。

「おばさん」

「あら、早いわね」

おばさんは蒔絵の声を聞いて笑顔を彼女に向ける。だがその笑顔は一瞬で崩れ去ってしまった。

「な……」

顔がハンマーで割られた鏡の様になった。今自分が見ているものが信じられないといった顔であった。

「ちよつと蒔絵ちゃん」

「?どうしたの?」

蒔絵はわざと何でもないといった顔を作ってみせた。

「何驚いてるのよ、おばさん」

「何がっていうのじゃないわよ」

おばさんはその割れた顔のまま蒔絵に対して言う。聞けばその声も割れてしまっていた。

「あのね」

「うん」

「貴女、その格好でお見合いに行くつもりなの!??」

「そうだけど」

蒔絵はおかしそうに笑って言葉を返す。

「お見合いでしょ。だからお洒落して来たのよ」

「おしゃれはいいわよ」

おばさんは困った顔でそう返す。

「それはね。けれど」

「けれど。何？」

わざととぼけている。だが動転しているおばさんはそれに気付かない。思えば罪な悪事だ。

「幾ら何でも。場違いよ」

「そうかなあ」

またわざととぼけてみせる。しかしおばさんはやはりと言いつづきかそれに気付かない。あまりにも動転しっぱなしだから。

### 第三章

見ればかなりとんでもない格好だった。膝上で腰までギリギリの真つ赤なキャミソールに黒いハイヒール、ストッキングはガーターだ。腕には色とりどりの派手なブレスレットを何個も着けて指輪もふんだんにしている。顔も化粧も濃く、下ろした髪にもアクセサリをふんだんに着けてムースで荒っぽくまとめている。左手には何か絵まである。そいじよそいらのガラの悪い女の子ですら裸足で逃げ出す様な格好である。映画に出てきそうと言っても言い過ぎではなかった。

「デイスコに行くんじゃないから」

「ジュリアナとか？」

「実はおばさんの年代はそんなところである。意外と若いのだ」

「もうないでしょ、それ」

「あつ、やつぱり」

「それでもその格好はやり過ぎでしょ」

「これ位しないとインパクトないのよ」

「インパクトってお見合いに行くのよ」

「うん」

これには頷いてみせる。

「インパクトは大事だけれどそのインパクトじゃないわよ」

「大丈夫だって、今は」

「どうだか」

「おばさん、私を信じてよ。絶対にうまくいくから」

「これで失敗したらどうするのよ」

「それは有り得ないから」

実はおばさんの考える成功と蒔絵の望む成功は全く正反対であった。おばさんはお見合いが成功することを願っているが蒔絵はお見合いが潰れることを狙っているのだ。ここが全く違う点であった。

「じゃあ行くわよ」  
「うん」

何はともあれ二人はお見合い場所のレストランに向かうことになった。結構名前の知られたイタリアンレストランである。

「フレンチじゃないんだ」

「あちらとお話してちよつと趣向を変えてみたのよ」

おばさんは洒落た赤と緑の入り口の前で言う。如何にもといった感じの派手な外観の入り口であった。イタリアらしいと言えばらしい。

「フレンチだと堅苦しいでしょう?」

「まあね」

これは同意であった。実は蒔絵も堅苦しい感じのフランス料理よりもあけっぴろげなイタリア料理の方が好きなのである。特にオリーブをふんだんに使っているのが彼女のにはよかった。

「それでイタリアンにしたのよ」

「有り難う」

「まっ、貴女の為でもあるけれどね」

おばさんは優しい笑みを蒔絵に向けてこう言った。

「こつちの方が何かとお話し易いでしょう?」

「まあね」

「それでそんな格好じゃなかったら」

「だからこれでいいのよ」

そもそもフレンチだとこんな派手な格好では入ることさえ出来ないだろう。それも狙っていたがこつちは外れてしまったようである。

「この格好でね」

「そんなディスコに行くみたいな格好で?」

「だったら扇子も持って来た方がよかつたかしら」

「馬鹿なこと言うのは止めなさい」

おばさんはまた口調をむっとさせてきた。実はこのおばさんはおばさんと言ってもまだ若い。蒔絵とは十歳程しか違わないのだ。か

つてはジュリアナで派手に遊んでいたから扇子も知っていた。

「とにかく入るわよ」

「はい」

二人は何はともあれ店に入った。まずは店員が案内する。

「いらつしやいませ」

タキシードの洒落た格好のボーイが出て来た。何となくキザというよりは軽薄な感じがする。これもイタリア故であろうか。少なくともフランスのそのの様に悪く言えばお高く止まった感じはしない。「予約していた有坂ですが」

おばさんの姓である。これは御主人の姓であり、元の姓は宮崎という。

「有坂様ですね。こちらです」

「はい」

落ち着いた様子でボーイに案内される。当然ながら蒔絵も一緒に店の中を進んでいった。

店は白を基調として木が多く配されていた。あちこちの装飾がやはり鮮やかだ。

蒔絵はそんな店内を見回りながらボーイに案内されていく。そして店の一番奥にある個室に案内された。

「こちらの部屋でしたね」

「ええ」

おばさんはボーイの言葉に頷く。彼に先導されその部屋に入った。部屋の中は店内とは違っていた。気品のある造りになっていて如何にもお見合いに使うといった感じであった。蒔絵はその中を見やすくそう感じた。

部屋の中央には白いテーブルかけがかけられた大きなテーブルがある。六人は座れそうだった。そこに座って話をするであろうことは明白であった。蒔絵はいよいよその戦いの時が迫っていることを感じていた。

「それでは後程」

「はい」

席を空けられそこに座る。おばさんと席を一つ開けて一方を占めて座る。彼女はそこでまだ来ない相手を待つことになったのであった。

「もうすぐよ」

おばさんは二人になると蒔絵にまずこう言った。

「あちらさんが来られるのは」

「そう」

「わかつてると思うけどね」

おばさんは念を押してきた。

「ちゃんとしなさいよ」

「だからわかつてるって」

蒔絵は相変わらざるの笑みを返す。

「ここはね。決めるわよ」

「頼むわよ」

蒔絵にもこれからのことがかかっていた。やはりおばさんが考えている方向とは正反対であった。何はともあれ相手が来るのを待っていた。

「お連れの方が来られました」

暫くしてまたボーイさんがやって来た。そして二人にこう述べた。

「わかりました」

おばさんはそれを聞いて頷く。

「わざわざ有り難うございます」

「えい、それではこちらへ御案内致します」

「はい」

こうして見合い相手が部屋の中に案内された。やって来たのはおばさんと同じ様に着飾った年配の女の人と写真で見たあの若い人であった。

## 第四章

確かにその人だった。だがそこにいたのはあんな如何にも真面目そうな人ではなく髪を派手に立たせ、ブルゾンにレザーパンツを着こなしたかなりパンクな格好の御仁であった。まるでコンサート会場に行く様な格好であった。少なくともお見合いで見る格好ではなかった。

「裕行さん、こっちよ」

「はい」

どうやら彼の名は裕行というらしい。名前からはとても想像出来ない格好であった。

「あの」

おばさんは彼等に声をかけようとする。だがどうにも言葉が出ない。い。

かわりにあちらから声がかけられてきた。その年配の女性が言う。

「はじめまして」

「ええ、はじめまして」

おばさんはその裕行というパンクの青年に戸呆然として席を立つのも忘れてしまっていた。

「木原と申します」

「はい」

相手の名前はおばさんは知っていた。だが蒔絵は元々この話は何が何でも破談にするつもりであったので覚えてはいない。そんなことよりどうやって話が潰れるかの方が問題だったのだ。

「こちらは息子の裕行です」

「はじめまして」

そのパンクないで立ちからは想像もできない程礼儀正しい挨拶であった。これは銀行員だけであった。

「はあ」

「何でも最近お見合いではこうした格好で出るのが流行っているらしくて」

「そつみたいですね」

おばさんはあちらの言葉に頷いた。少し考えればそんな筈がないのが見れば蒔絵もあちらの裕行も同じような格好をしている。これでは信じてみる気にもなれた。

「それで。こちらに」

「はい」

おばさんもあちらの御母堂も同じ様な顔になっていた。戸惑いを隠せない。

「まさかとは思いましたけど」

「お互いそうでもないようですな」

「ええ。ではまずはお食事でも」

こうしてかなり変わった格好のお見合いがはじまった。蒔絵は相手になる裕行を見て内心激しく舌打ちしていた。

(参ったわね)

これが最初の心の中の言葉であった。

(この格好なら絶対に大丈夫だと思ったのに)

よりによつてお見合いにそれはないだろう、というとんでもない格好をわざわざ選んだのだ。それを見合いをすぐにブチ壊す為にだ。それは確実に成功する筈だった。

ところがそうはいかなかった。相手が同じような格好をしてな何の意味もない。そもそもこんな格好が流行の筈がない。あえて嘘までついたというのにそれさえも失敗していた。

非常識はそれが常識になった時に非常識ではなくなる。この場において二人の格好がまさにそれであった。彼女はまた舌打ちした。しかし舌打ちだけではどうにもならないのだ。

(どうしようかしら)

とにかくこれからどうかしないと。下手をしたら結婚してしまう。そんなつもりは毛頭ない。彼女はどうしようか考えていた。あれこ

れ考えているうちに食事が運ばれてくる。

スパゲティが最初に来た。イカ墨のスパゲティ、ネーロである。

「イカ墨のスパゲティですね」

「はい、当店の自慢のメニニューです」

ボーイはにこやかにおばさんにそう答える。

「チーズもありますので」

「それでは」

「はい」

おばさんはチーズをふりかけて食べはじめた。黒いパスタが蒔絵と裕行の服の色と重なって見えた。彼女はそれを見てあることを思いついた。

(そうだ)

これなら間違いないと思った。すぐ行動に出る。

裕行も。何と二人は同時に行動に出たのだ。

パスタを派手に音を立てて食べる。言うまでもなくマナー違反だ。だが二人はそれをあえてやったのだ。

「ちょ、ちよつと」

「裕行さん」

おばさんもあちらの御母堂もそれを見て慌てて声をかける。

「スパゲティはそんな食べ方じゃ」

「わかっているでしょう？」

「これが今の流行なのよ」

蒔絵はまた嘘をついた。

「お母様、今はこうして食べないと駄目なのですよ」

(!?)

蒔絵は裕行も同じ内容のことを言ったのでふと彼の方を見た。

(どづいつこと!?)

見れば彼も同じであった。目だけギョツとして彼女の方を見ていた。

(同じことをするなんて)

当然流行とかそういうのは嘘っぱちである。こんなことが流行っている筈がない。だが彼女はお見合いをぶち壊す為にあえてしているのである。そして彼女と同じことをどういうわけか向こうもやっているのだ。

「そうなの」

「そうよ」

蒔絵は得意満面に嘘をつく。

「そうなんですよ」

向こうも。テーブルを挟んで全く同じ光景が繰り広げられていた。

「スパゲティを静かに食べるのはもう古いって言われてるんですよ」

「そうなのよ」

奇妙なことだが蒔絵は裕行の言葉に相槌を打っていた。

「ですからこれはいいのです」

「イタリア料理だから気取らなくていいじゃない。そうでしょ？」

「それもそうね」

二人が一緒に言うのなら間違いないと思ったのだろうか。おばさんもあちらの御母堂もそれに頷いた。

「じゃあまた食べましょう」

「丁度サラダが来たし」

パスタを食べ終わった後にサラダ、魚、そして肉と続く。二人はここでもかなり無作法に食べた。だがそれも今はこれが流行りだとかイタリア料理だから気取らなくていいとか適当な嘘を言って潜り抜けた。

## 第五章

そのうちに料理自体は終わった。蒔絵も裕行もワインをかなり飲んでいた。

「蒔絵ちゃん、大丈夫なの？」

「大丈夫だって」

真っ赤な顔で言われても説得力がない。派手な化粧の下はもう紅色であった。

「裕行さん、お酒はもうそれ位にして」

「構いませんよ、お母様」

彼も真っ赤な顔をしていた。デザートのアイスクリューももう食べちゃってしまっている。

「ところで」

「ここでおばさんは向こうに声をかけた。

「はい」

「後は邪魔者は席を外しまして」

「そうですね」

あちらの御母堂もそれに頷いた。

「まさか」

蒔絵はその二人のやり取りを見て本能的に悟った。

「若い人同士でということだ」

「それでは」

こうして二人はそそくさとその場を後にした。席には蒔絵と裕行だけが残った。

蒔絵はこの状況をまずいと思った。これでは話を潰すのにも相手がないからだ。

彼女のターゲットは最初見合い相手であった。だが相手と同じ行動を取ってしまうとなると。ターゲットは同行している御母堂ということになる。だが彼女がいないのではどうしようもなかった。

口を開くにも開けない。どうしていいかわからなかった。

「あの」

だがここで向こうから口を開いてきた。

「はい!？」

「このお見合い、ひよっとして潰す気でしたか？」

向こうからこう切り出してきたのだ。

「えっ!？」

「いえ、若しかすると、と思ひまして」

彼は言った。

「その格好も様子も。そうですね」

「それは」

「実は僕もなんですよ」

彼はそのパンクな外見からは想像も出来ない程の礼儀正しい物腰でそう述べた。

「今回のお見合いは。あまり気が乗らなくて」

「貴方もだったんですか」

蒔絵はそれを聞いて急に気が楽になった。それでこう言った。

「貴方もって!？まさか」

「ええ、私もなんですよ」

そして笑っていた。

「何か。今は結婚したくないな、って思ひまして」

「やっぱりそうなんですか」

裕行はそれを聞いて顔を明るくさせた。

「同じですね。僕もそうでした」

「やっぱり」

二人共格好からは似ても似つかわない礼儀正しい様子で話をはじめた。

「今はまだ。一人でいたくて」

「御一人なんですか？」

蒔絵はそれを聞いて尋ねた。

「はい、一人です」

「御一人ですか」

「この前恋人と別れたばかりで」

「何か似ていますね」

「似ていますといますと!?!」

「実は。私もそうなんです」

蒔絵はうつすらと笑ってそう述べた。

「貴女も」

「はい。それで暫くは一人でいたいと思ひまして」

「その格好を」

「これでお見合いを確実に潰すつもりだったんですけれどね」

「考えることは同じだったみたいですね」

「そうですね」

二人はそう言って互いに笑みを見せ合った。

「何か、僕達似ていますね」

「ええ」

確かに行動はそっくりだった。ここまでくるとかえって笑ってしまふ。

「けれどまさか。相手がそんな格好するなんて」

「思いませんでしたわ」

蒔絵はリラックスしていた。話しているのも楽しくなってきた。

「まさかとは思いますが」

「そうですね」

裕行はそれに相槌を打つ。

「こんなことってあるんですね」

「そうですね。何か面白く思えますよ」

「はい。何かこれでお別れなのが」

「惜しい位に」

ここでも二人同じ考えであった。

「あれっ!?!」

そしてふと出て来た言葉に顔を見合わせた。

「おかしいですね」

「そうですね、何か」

名残惜しいと。思えば不思議な言葉であった。

「お互いお見合いを潰す為にこんな格好してあんなことしたのに」

「こんなこと言うなんて」

「けれど。何か悪い気はしませんね」

「そうですね」

「高橋さんでしたね」

「はい」

まずは蒔絵が答えた。

「木原さんでしたよね」

「はい、そうです」

今度は裕行が答えた。

「今更こんなこと言うのは何ですけど」

「ええ」

二人は顔を少し赤くさせて言った。蒔絵はその濃い化粧で赤いのがわかりにくい。

「結婚はともかくとしてお付き合い致しませんか」

「はい」

蒔絵はその言葉にこくりと頷いた。

「私でよければ」

「こちらこそ。お願いしますね」

こうして二人は交際をはじめることにした。結婚はともかくとして付き合いははじまったのである。

「何はともあれよかったじゃない」

おばさんはその結果を聞いて嬉しそうにこう言った。

「最初はどうなるかって思ったけれど」

「それは私もよ」

お見合いの後で喫茶店で話をしていた。コーヒーを飲みながら二

人で話をしている。

「実はね」

「何なの？」

「このお見合い、嫌だったのよ」

「やっぱりね」

おばさんはそれを聞いて頷いた。

「わかってたの？」

「そんなの態度見ればわかるわよ。あれだけ写真見る時点でこねてたんだから」

「あの時ね」

そういえばそうであった。彼女はその時から渋々だったのだ。おばさんにはそのこともわかっていたのだ。

「わからない筈ないでしょ」

「はあ」

「私だってこういうこと何度もやってるんだから」  
「けれど。失敗したわ」

蒔絵は両手を頭の後ろで組んでこう言った。

「自分でもお付き合いすることになるなんて思わなかったから」  
「その割りに嫌な顔じゃないわね」

「今はね」

そう返す。

「だって。お互い同じこと考えたし」

「あらあら」

「二人で話してみると本当にそっくりだったし。悪い気はしなかったから」

「だからお付き合いすることに決めたのね」

「そうよ。けれど結婚は考えていないから」

「今のところは？」

「まあね」

返事をする声が強くなった。何故か頼りなげな顔になって少し俯

いた。

「やっぱり。まだ一人でいたいから」

「まあそこはじっくり考えなさい」

おばさんはそんな蒔絵に優しい声をかけた。

「時間はあるからね」

「そうさせてもらおうかな」

蒔絵は裕行と付き合うのも悪くはないと思った。むしろこれから二人で楽しくやっていきたいと思っていた。

お見合いの悪ふざけ、それから始まった話。だが二人の交際はここからはじまった。潰れる筈の話、壊すつもりだった話、実る話になったのであった。

悪ふざけ 完

2006・6・10

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1046b/>

---

悪ふざけ

2008年11月7日06時54分発行